

「多文化共生フォーラムあいち 2016」報告書

1 13:00~13:05 主催者挨拶

愛知県知事 おおむらひであき 大村秀章

平成 28 年 9 月に発表された最新の法務省「在留外国人統計（平成 28 年 6 月末現在）」によると、愛知県には約 22 万人の外国人が暮らしており、6 年半ぶりに大阪府の人数を上回り全国で 2 番目に多い都道府県となった。近年、外国人の永住化や国籍の多様化が進んでいる。いちばん多い国籍はブラジルの約 5 万人で、ベトナムも 1 万 5,000 人を超えている。特に、本県は日本一の産業県ということで、技能実習生として働きに来る人は全国最多である。

外国人も日本人とともに学び、働き、安心して暮らすことができるよう、本県では「あいち多文化共生プラン 2013-2017」を策定し、多文化共生の社会づくりを積極的に推進している。

このプランでは、毎年 11 月を「あいち多文化共生月間」と定め、多文化共生に関する普及啓発活動を集中的に行っている。本フォーラムは、「外国人が多い地域だからこそできるまちづくり」をテーマに、今年の「月間」のメインイベントとして開催するもので、福祉や介護、学習支援など様々な分野の垣根を越えて、地域全体で多文化共生のまちづくりに取り組むための方法について考えたい。

なお、本県は特に外国人の子どもに対する日本語教育をしっかりと推進したいと考えており、外国人児童生徒が多い小中学校には県単独事業として日本語教育適応学級担当教員をたくさん配置している。

多文化共生社会づくりは、行政の力だけで成し遂げることができるものでなく、地域で活躍されている NPO やボランティアをはじめ、企業、学校、地域のコミュニティなどとの連携が不可欠である。本フォーラムを契機として、多文化共生の推進について、一層の関心を高め、活動の幅を広げていただくことを期待している。



2 13:05~13:30 表彰式及び作文朗読

(1) 愛知県多文化共生推進功労者表彰

多年にわたり多文化共生社会づくりに取り組んできた個人又は団体で、その功績の顕著なものを表彰した。

ア あかばねひらがなの会（^{たはら}田原市推薦。活動年数 10 年 2 か月）

技能実習生や結婚等で地域に暮らしている外国人女性たちに対し、日本語教室を開催している。また、外国人と地域の人が共に参加できる文化教室の開催、悩み事や就職の相談、機関紙の発行を通じ、外国人が地域の生活に馴染み、地域の理解が得られるようなサポートを、独自に予算を確保しながら続けている。



イ ^{かにえ}かにえ国際交流友の会（蟹江町推薦。活動年数 23 年 7 か月）

日本語教室だけでなく、スピーチ発表会や国際理解講座の開催に加え、会員と外国人会員が共に地域の清掃活動に参加するなど、外国人住民が地域とのつながりを持てる取組を行っている。また、小中学校や行政への通訳ボランティアの派遣も行い、地域内での多文化共生促進に貢献している。



ウ ^{なごや}NIC日本語の会（^{なごや}名古屋市推薦。活動年数 25 年 1 か月）

長年に渡り、地域の外国人住民に対して日本語学習の場を提供している。地元企業にヒアリングをして作成した独自教材による指導のほか、学習者の交流の場の創出等を行っている。指導のノウハウ本も作成して学習方法を広めるとともに、本会のボランティア経験者が新たに日本語教室を開設する等、地域で多文化共生の促進に貢献をしている。



(2) あいち多文化共生作文コンクール優秀作品表彰・朗読

外国人と日本人の相互理解を深めることを目的に、県内の小中学生又は小中学生と同年齢の方を対象に「みんなでつくる多文化共生社会」をテーマに作品を募集。計 466 点（小学生の部：57 点、中学生の部：409 点）の応募作品の中から優秀賞 2 点と佳作 5 点を選び、本フォーラムにて各部の優秀賞を表彰した。表彰後、優秀賞受賞者にそれぞれの作品を朗読していただいた。

ア 小学生の部

^{にしお}西尾市立八ツ面小学校 ^{やつおもて}4 年 ^{いながきそう}稲垣奏さん
題名：『お母さんのやさしい教材』



イ 中学生の部

^{なんざん}南山中学校女子部 ^{すずきまゆ}1 年 鈴木万結さん
題名：『様々な文化とともに生きる』

3 13:30~14:40 基調講演

『日本語教室と地域コミュニティをつなぐ』

講師：studio-L ^{すたじお える} 代表 ^{やまざきりょう} 山崎亮氏

愛知県は全国的に見ても日本語教室の活動が盛んな地域である。そこで、日本語教室は日本語を教えるだけの場所ではなく、地域を元気にしていくための原動力になり得ること、そして「コミュニティデザイン」という視点から、日本語教室と様々な関係機関をつなぎ、地域を巻き込むにはどうしたらいいかについて説明していただいた。内容は以下のとおり。

・あそびの王国+ガキクラ（兵庫県）：

子どもの遊び場（公園）を設計をした際、大人となった自分では子どもが感じる楽しさが分からなくなってしまっていたため、直接子どもにニーズを聞くことをした。学校の体育館を借りて子どもに段ボールや発砲スチロールなどを使って遊ばせ、それを録画し、プロセスや子どもの好きな遊びを観察して設計のベースとした。子どもの遊びから、言語を介さずに設計をすることができた。

ただし「言語を介さず」とはいても、実際は地域の大学に通う学生ボランティアにプレイリーダーとして協力してもらい、体育館で子どもが遊びながら、「どんなことがしたいか、こんなものをつくってみようか」などのコミュニケーションを取ってもらっていた。公園が完成した後も彼ら自らグループを結成し、毎週日曜に自主的に子どもと遊ぶ機会を設けてくれ、大学のサークル活動にまで発展した。さらには、徐々に学生だけでなく地域の大人も入ってくるようになった。

その人たちがいれば遊具がなくてもそこに遊び場が生まれるということ、つまり「人が介する」ということの面白さに気が付いた。

・ユニセフパークプロジェクト：

日本に在住する外国人や国際会議等で来日している人の子どもたち約 100 人（約 20 か国）と、キャンプと称して 2 週間山の中で自分たちの遊び場をつくった。山の中で遊び場をつくること自体が子どもに遊び場になるのではないかと思い行った活動だったが、本当の目的は「多文化共生」。「異なる文化を知りましょう」と言葉で説明しても子どもには退屈かもしれないので、「遊びをつくる」ことを主目的とし、「皆で一生懸命遊び場をつくっていたらその間に異なる文化のことを知っていた」という方法を取った。

自分はデザイナーだったが何もデザインしておらず、全て子どもたち自身がつくった。子どもたちは、2 週間泊まり込みで一緒に過ごす経験の中で、遊具をつくるということから多文化を感じるという面白い体験ができた。

世界の子どもが来る 2 週間以外は、地元の子どもの山に遊びに来て一緒に遊具づくりをして、外国人が来たら一緒に遊んだ。ノンバーバル=非言語でコミュニケーションを取ることができていた。

今回は 150~200 人の大学生のプレイリーダーにチームをつくって携わってもらったが、その際「非営利組織のマネジメント」も勉強した。給料をたくさん貰って働く組織はつくれないので、彼らが楽しく働け、自分たちの持ち味を発揮できる組

織を有機的につくっていかなければならない。つまり、「自分たちでこういうことがやりたい」という思いから組織をつくっていかなければならない。目的が先にあって、それに対して戦略・戦術をつくって、組織を分けていくツリー構造では機能しない。やりたくない仕事は給料を貰わなければ継続しない。非営利組織をつくるには、むしろ「お金を払ってでもやりたいことは何か」と聞いていき、継ぎ接ぎだらけの組織をつくっていき、その組織を一度動かしてみて、少しずつ変えていかなければならないということ学んだ。

このときの経験から、「デザイナーが受け手のニーズを想像してつくった物を与えるだけでは寂しい」と思うようになった。受け手自身が欲しいものを言い、できれば彼ら自身でそれをつくってもらいたい。特に都市計画は、専門家が入って仕切るよりも、自分たちのまちの将来について語り、学び、実際に行動を起こしてみる、そこで友だちができたり様々な考えがあることを理解する。そういった人たちが豊かな人生を歩んでいける方がいいのではないかと考えるようになった。

・**小豆島コミュニティアート（香川県）**：

「アートをつくる」という依頼があったら、「その作品をつくる人を集めて組織化し、そこでつながった人たち自身」をアートと言いたい。アートをつくるために集まった人たちのコミュニティのつながりが強くなったことこそが我々が作りたかった作品＝コミュニティ・アートだった。

ある目的で集い、その人たちがその目的を達成した後も自分たちで別の目的をつくって、そのつながりの中で生きていこうとすることはコミュニティデザイナーとして嬉しいこと。皆、仕事以外の時間を使ってまちを元気にしつつ、自分の人生を面白いものになっている。

「多文化共生」に置き換えて考えてみると、「異文化を互いに知る」のではなく、「大きな何かをつくる間に互いのことを知り合っていた」ということも方法の一つかもしれない。日本語教室で日本語を学ぶことも大事だが、一旦その目的を外して見て、日本語や言葉を使わないで何かを一緒にコツコツつくっている間にその人の凄いところが見つかったり、一緒にスポーツや料理をやっているうちに新たな発見があるかもしれない。「多文化を知る」という目的を掲げるときと、その目的自体をあまり考えず、一旦違うかもしれない、関係がないかもしれないと思うようなことで人を集めるというのも一つの方法かもしれない。その方が「多文化共生マインド」を持っていない人を集められるし、そういった人たちが結果的にそこで多文化共生について理解できるきっかけになると思う。今、一生懸命「多文化」で情報発信していてもいつも同じメンバーしか来ないというときは、少し目的をずらして見て、その目的で入ってきた人を結果的に多文化共生の分野に巻き込んでみるというのも方法の一つ。また、地域に自分たちが出て行って、どれだけ地域の中で自分たちの存在感をアピールし認めてもらうかということも重要である。

・**新宮市高校ワークショップ（和歌山県）**：

・**黒松内町総合戦略（北海道）**：

（ワークショップや人集めのユニークな事例紹介）

・ **はじまりの美術館（福島県）**：

「生の芸術＝アール・ブリュット」（芸術教育を受けたことのない人たちがつくる作品）の巨匠には知的障害を持つ人も多く、そのためアール・ブリュット＝障害者アートと思われる傾向にある。実際にはアール・ブリュットにおいて障害の有無は無関係である。そのようなイメージがあっただけ、それまで西日本にアール・ブリュット専門の美術館が5つあったが、そこへは、地域の人がいちばん来館していないことが分かった。その理由として、障害者アートのための場だと思っている人が多く、障害者支援は大事だと思っているも頻繁には見に行くことができないのが一点、もう一点は美術館自体の敷居が高いということだった。そこから、「地域住民がいちばん来るようなアール・ブリュット美術館を東日本で初めてつくりたい」という依頼を受けた。

このプロジェクトにおいても、試行錯誤の中で、地域でそれぞれの人が役割を担った。子どもにもできることはあるし、機転が利くこともある。外国人も同じで、様々な立場の人が様々なアイデアを少しずつ出し合える状況をつくっていくことが大事であり、「地域づくりを効率よく進める」というのは矛盾だと思う。地域づくりを効率よく進めると、できる人が全て進めていってしまうし、効率よく進められる人にお膳立てしてもらっても子どもたちは本領を發揮できない。外国人もそうかもしれないし、障害者も自分が活躍できる場を選び取ることができる。彼らの本領が發揮できるようにするためには、「手間が掛かる」、「面倒くさい」、「失敗が多い」、「煩わしい」ということが必要である。地域づくりは、進みが物凄く遅い。右往左往しているうちに気付いたらそれぞれの人たちが皆それなりの役割を持っていて、それぞれがどんな人なのか分かっていて、その人たちとまたゆっくりと次のプロジェクトを起こしていけるようになる。

「多文化共生」をやろうと思ったとき、あるいは日本語教室を核にして地域で様々な文化を理解してもらおうと思ったとき、その動きを極めて遅くしていくこと、様々な人が関われる「関わりしろ」を用意することが大事である。笑える失敗を繰り返して、それが積み重なって、「多文化共生」に興味がない人たちもそこに入ってくるきっかけを地域でつくることができたなら、気付いたときには日本語教室が地域の核になっているかもしれない。「多文化共生をやっていた人たちが地域の核になっていた」という状況をつくり出すことができると思う。



4 14:50~16:00 パネルディスカッション

『“多文化”を“他分野”につなげる・広げる』

パネリスト：一般社団法人 ^{あいーしー}iec 代表理事 ^{かわむらやちこ}河村八千子 氏

国籍と言葉と文化の違いを受け入れ、「みんな違ってみんないい！」を合言葉に、利用者と支援者が地域と共生できる場を目指した、児童発達支援・放課後等デイサービス「^{ぽこあぽこ}poco a poco」を運営。外国人を積極的に受け入れる。河村氏はNPO法人フロンティアとよはし理事長も務める。【活動拠点：豊橋市】

特定非営利活動法人東海外国人生活^{おうえい}センター 理事長 王 榮 氏

中国語医療通訳者有志により、在住外国人が安心して、希望を持って暮らせるよう生活全般に対するサポートを行いたいという思いから活動を始める。近年は、外国人の高齢化に対する課題解決に向けて「外国人高齢者と介護橋渡しプロジェクト」にも取り組む。【活動拠点：名古屋市】

特定非営利活動法人^{もりあきこ}プラス・エデュケート 代表理事 森 顕子 氏

国籍、経済力などの差が教育の差とならないよう、外国人の子どもたちへの支援を活動の中心としている。子どもたちの未来のため、将来の日本を支える人材育成のために、主に子どもたちへの日本語教室や学習支援、進路相談、就学支援などを行う。【活動拠点：豊明市】

国際交流 NGO ^{びば}Viva ^{ながおはるか}おかざき！！ 代表 長尾晴香 氏

国籍・文化の壁を越えて誰もが住んでよかった^{びば}Viva (=バンザイ) おかざき！！と思える地域社会のために活動している。外国人向けセミナーや日本語教室、相互理解のための交流イベント、日本人住民と外国人住民をつなぐ人材育成などを行う。【活動拠点：岡崎市】

コーディネーター：山崎亮 氏

基調講演に引き続き「他分野の地域活動団体との連携」をより実践的に考えるため、本県で既に「外国人支援+@」という発想のもと先駆的に活動している多文化共生推進団体の代表者などをパネリストに迎え、多文化共生社会の形成に向けて、他分野で活動する人々をどう巻き込んでいくのかを具体的にディスカッションしていただいた。内容は以下のとおり。

—— (各者からそれぞれ活動紹介) ——

山崎氏： 「多文化を他分野につなげる・広げる」のテーマと照らし合わせてみると、河村氏のところでは「障害」とのかかわりがメインになるかと思う。王氏のところは「介護」から他分野に入っていったと理解した。一方で、森氏と長尾氏は「他分野」と言うところのどのようなつながりがあるか。あるいはまだつながりがないからこそ「むしろこんなことをやってみたい」という話を聞かせて欲しい。

森 氏： 外国人の子どもは、土日は家事を手伝うなどで家から出ない子どもも多い。本来なら、家庭も巻き込んで、もう少し地域とつながれるようなことに参加させてあげたり、メンバー自身ももっと外に出て、他分野と交流することで風通しをよくしなければいけない。しかし、メンバーは日本語教師経験者ということもあり、学習内容や成果に目が向きがちで私自身も「土日は教案を書こう」と思ってしまう。講演を伺っていて、私自身の考えも変えなければいけないと思った。

「日本語を介する」ということで言えば、子どもは習得がとても早く、子どもが両親の通訳をやっている状況もある。防災についても、病気や介護のことも、子どもを通じてつながっていくことができると思うのだが、本当は私たちメンバーがいちばんオープンではなければいけないと思っている。

長尾氏： 「“多文化”を“他分野”につなげる・広げる」ということが今の私たちのメインテーマ。元々メンバーの中に外国人の当事者がいて、外国人とかかわる私たちが気付いたことの中から活動を実施してきたのだが、「多文化共生」は「文化が違って素敵だね」では終わらない。日本で生活をするということは、仕事もしなければいけないし、学校や病院にも行かなければいけない、障害や介護のことも出てくるなど様々なことがある中で、やはり「文化のちがひ」だけではない。そういったバックグラウンドを持った人がどう生きていくかをサポートしていくときに、本当にお金がない、人がいない。だから、いろいろな人を巻き込んでいかなければいけないということで、まず「まちづくり」という考え方自体が地域の問題だということに気付いてもらって、いろいろな人にかかわってもらわなければいけない。その中で、私たちは何か活かせるポイントがあるのではないかと試行錯誤しているところ。実際にまちづくりをやっている人に講演をしてもらって、“関係のない人”をどう巻き込むのかということと、日本語教育や多文化共生と関係があるのかということ、何かしらつなげるということに今取り組んでいる。

山崎氏： 「多文化共生」をやろうと思ったとき、そのメンバーひとりひとりには生活があり、生活の中にはもう既に「他分野」がある訳で、いろいろな分野に関わりながら自分の生活を成立させている。だから、「多文化共生」をしようと思った人自身が皆生活を持っているということになれば、そこを全人的につないだりサポートしていこうと思ったとき、自ずと「他分野」にならざるを得ない。様々な分野についてサポートしたり関係づけたりしなければいけない。

河村氏： 外国人の子どもの支援活動をするようになってから、私は逆に子どもに成果を求めなくなった。急かして何かをさせるということがとても減った気がする。今はもっと何かをさせることに大変な子どもたちと付き合うようになったのだが、これまで障害のある外国人の子どもたちは日本語ができないだけなのか本当に障害があるのかとても分かりづらい状況だった。今、豊橋には「子ども発達センター」ができて、そういったところを受診して障害があるということが分かって私たちのところに来る訳だが、障害がある子どもたちもきちんと継続ができて、楽しく勉強ができる。私たちは基本的には公文式を導入しているが、そういったやり方が見つかり、それを別の学習支援教室で活かせる。障害のある子どもたちも楽しく長く続けてやれることは、外国人の子どもならもっと達成感を出せるかもしれないし、もっと楽しく、継続できるかもしれない。他分野とつながって、そういったことが見つけられる場ができた。

私たちのスタッフは全員放課後デイサービス経験者なので、障害のある子どもたちが様々な家庭の中で生きていて様々な障害のある状況の中で生きているということ、それを全て包括的に捉えて、その子どもとどう向き合うかということ

きちんとできている人が多い。子ども、それから保護者と向き合うということについて、スタッフの意見はとても参考になるので、「障害がある子どもの支援」(=iec)と「障害がない子どもの支援」(=フロンティアとよはし)という意味では、どちらも子どもたちが同じように教育を受けられるようになっていく場ができたことはとてもよかったと思う。

王 氏： 今まで「介護」ということはおそらく「多文化共生」の中ではほとんど意識されていない分野だったと思うが、この多文化共生社会の中で、「介護」はこれから新たな分野として認識して取り組んでいかないといけないところ。今一生懸命取り組んでいるのは“入口”のところ、つまり施設を利用するまでのところの通訳の養成を中心にやっているのだが、これを更に施設の“中”に入っていくときに、どうやって既存施設や介護分野とのかかわりを上手くやっていくのかという課題も新たに考えていかないといけない。医療通訳の場合は「必要なときに通訳が入る」かたちになるので時間が決められているが、例えば一般的な施設内での通訳を考えると、常駐で朝から晩までずっと利用者についていく訳にはいかないとと思う。この“中”の動きに入っていくときに、一つクリアしないといけないことがある。例えば、日本人職員と中国人利用者との間に通訳が入ったとき、通訳は「職員」ではないのだがずっと利用者についていくことになり、利用者から見ると誰が職員で誰が通訳なのかが分からない。不平等ではないのかといったようなことも起こり得るので、今後の課題として、施設の“中”に入っていくときに「通訳」の立場をどう位置づけていくのかを全体的に考えていかなければいけない。今トヨタ財団の助成金をいただいて、来年3月までは通訳派遣を無料で行えるよう賄っているが、4月以降の財源をどう確保するかということもある。当然、今の介護保険制度において「通訳」は保険対象に含まれていない。施設職員や利用者からとても感謝されており、私たちとしてはできればずっと続けていかなければいけないし、そのために立ち上げたプロジェクトなので、「財源確保ができていないので4月以降はできません」とは言いたくない。この悩みを今後解決していかないといけない。介護分野での通訳を活用・継続していく上での大きな問題の一つがここにあると思う。

現状ではボランティアベースで通訳を動かすのは難しい。通訳謝礼(交通費含む)を助成金の中で予算を組んでいるが、全く無償となるとなかなか難しいところがあると思う。大きく言えば、この「介護通訳」を「ボランティア」ではなく一つの「職業」として確立させていきたい。特に、介護の場合は生活の中に相当踏み込んでいくので、守秘義務等がある中でそれを「ボランティア」でやってもらってよいかというところもあり、そういった意味でも「職業」のカテゴリーの一つとして今後確立できるようにしていきたい。

山崎氏： 王さんの話を聞きながら、「多文化共生」と「地域包括ケア」とを上手く組み合わせることができたら、何か新しい動きが出てくるかもしれないと感じた。

森 氏： 通訳人材の話だったが、「外国人支援」や「まちづくり」にかかわった人にとって人材不足の課題は必ず直面すると思う。私たちは学校の授業スタイルでや

っている日本語教室と、もう一つ放課後学習の教室をやっているが、放課後学習の方はどうしても理解度にかなり個人差が出てくる。仮に、教員1人で日本人の子どもを3～5人は見られるイメージがあるとすると、外国人の子どもの場合は1対1あるいは2対1くらいで、それも3年生と5年生を一緒にやるといったことをしないとおそらく成り立たないと思う。そうすると、やはりボランティアの力が必ず必要になる。ところが、「教育」は一朝一夕にできないのでどうしても「継続性」が必要で、ボランティアも「1回くらいは行けるけど毎週となると忙しくて行けない」となってしまう。よく「退職教員の活用」と言うが、必ずしも退職者が暇な訳ではなく、むしろ忙しい人の方が多く、いつも手伝ってくれる人がいない。一方で、今やってくれている人も新しい人が来てくれないと辞められない。「私はいつまでやったらいいのか」という相談をよく受ける。「ならば学生を呼べばいい」と言っても学生もまた忙しい。時給が貰えるアルバイトと交通費くらいしか貰えないボランティアを比べられると弱く、突然バイトのシフトのヘルプで日本語教室をキャンセルするということがある。本当に人が足りない。むしろ、日本語教室に来たいという外国人の子がいても日本人の先生がいないから断るという状況になってしまっている。「教育」も「介護」と同じく、「あと何回、あと何年やったら終わり」ということが分からないところが本当に難しい。

講演の中で、「こちらから『〇〇係を手伝ってくれる人』を探すのではない」という話があったが、今までは本当に逆のことをしていて、全部「自分でやらなければ」と思ってしまうと全て後手後手になってしまっていた。どうしたら進んで力を貸してくれる人を1人でも増やせるか、その人たちに楽しいと思ってもらえる雰囲気をつくれるか、本当に参考になった。

山崎氏： 日本語教室についても、手伝ってもらえるボランティアがいるんだったら、「私たちがやりたいこと」ではなくて、「その人たちがやりたいこと」から組み合わせてみて、本当にまずいことが起きるところだけはきちんと見ながら、少し違うと思ってもやってもらってみる。やってもらう中で、本人自身も前回のやり方を反省してまた次にどこかで集まって話し合ってみるというように、本人たちもまさにエデュケートされていく。確かに、ツリー構造で、アルバイトのシフトのようになってしまうと経済社会と争って人を引き抜かなければならなくなってしまうので、それよりも我々がやっている分野ではそうではない組織の組立て方というのがとても重要になると思う。

長尾氏： 1年前に理想の日本語教育を考えるワークショップをやったときに、「季刊ジャネット」の山崎さんの巻頭寄稿を題材にして、「私がやりたいと思っていたことはこれだ！」と思った。自分がやりたいことは「多文化共生」なのか。日本語教育を全く勉強していないので何の知識も専門性もない自分がやりたいことは何かと考えたときに、それは「地域をつなぐプラットフォームをつくりたい」ということで、それがたまたま「日本語教室」や交流会・セミナーだったのだということがスッと落ちてきた。日本語教室のボランティアがいきいきと活動していたり、交流会やセミナーの参加者が終了時間になってもワイワイしてて帰らない光景を見ると「これは“正しかった”、“よかった”」と感じる。しか

し、“感覚”ではなく、多文化共生の“成果”をなかなか地域に見せられないというところが非常に困っている。手間が掛かって紆余曲折ある中で皆に役割が出てきて外国人もかかわれるようになるのだが、行政の単年度予算の中で「これは来年も必要なのでもっと拡大して欲しい」と示せる成果を出しづらい。そうすると、予算が確保できず、人を雇えず、ボランティアで、、という悪循環にはまっている感がとてもしている。そういった中で「障害」や「介護」という1つの柱を決めて取り組んでいるのは本当に凄いことだと思う。私はそれがまだ見つからないので、いろいろな分野をやりながら、今の自分はどこをプッシュできるのか、どういうプッシュがあれば外国人も含めた自分の地域をつないでいくことができるのかということを探っている。

山崎氏： どうやって成果を出して、それをどうやってPRしているのかということ河村さんと王さんに聞いてみたい。もっと生々しくいうと、それをPRすることによってどうやって更に予算を取ってくるか、どう仲間を増やすのか。

河村氏： （特活）フロンティアとよはしの話になるが、この団体は私の前に代表がいて、ある程度土台があったので、「あるものの上に乗った」というのが一つ。私の代では、まず自治会・自治組織とつながろうと思った。私たちは全教室に母語を話せるバイリンガルのスタッフがいる。だから、日本人だけではなく外国人にも先生になってもらっていて、先生になれそうな外国人を自治会に入りながら物色して日本語教室に引き込んで、日本語能力試験を受けてもらって、スクールアシスタントや役所の窓口の通訳など行政の仕事に就かせるということ今やっている。ある女性は今、日本国際協力センター（JICE）の介護の初任者研修を受けていて、ヘルパー2級を取るための勉強をしている。私が人を定着させるためにやったことは、自治会や児童委員、民生委員など福祉関係の人と仲良くなるということと、日本語等を学ぶ外国人と同じ言語を話す人たちに先生になってもらうこと。

王 氏： 団体としては2014年8月に立ち上げたばかりで、これまで想いとヤル気だけで取り組んできているのだが、やはりスタッフにそれぞれの持ち味を上手に発揮してもらって、できることは皆でそれぞれやってもらっている。新しい団体がこの2年間ここまでできた理由の一つが「お互いにカバーし合う」といったところにあるのではないかと思う。あとは、やはりいろいろな団体とつながること。経験が少ない中で、いろいろな先輩団体から交流を通じてそれぞれの経験・ノウハウを勉強させてもらって、それを自分の活動の中に活かしている。いろいろなつながりをできるだけ多く持てるようにしている。今回トヨタ財団の助成金をいただいて活動できているが、これがなければ通訳養成等の取組は未だに実現できていなかったかもしれない。介護通訳は今までどこにも取り組まれていないことでもあるし、大きく言えば全国的なモデル事業ということもあったということもポイント。

一方で、何もかもゼロからのスタートなので、スタッフや協力団体と本当に時間を掛けていろいろなプログラムを考えた。これから必要になってくるこの介護通訳は、まさに山崎さんが言ったように、地域とのつながりを新たにつく

っていかなければならない。通訳はあくまで施設内でのことなので、外国人高齢者と地域のつながりというのは、実は今回のプロジェクトの一環としても考えている。おそらく既に介護用語教室やコミュニティ教室などは地域にあると思う。ちらしも配布されていると思うが、日本語が分からない人たちはそのちらしを見てもおそらく何も理解できない。せつかくそういう場所もあり、そこにかかわってくれる人材もいるのに、その情報が伝わらない。だから、やはりそういった情報をもっと多言語化していくということが外国人高齢者の介護の予防等にもつながっていくと思う。それにはやはり自治会や学区、行政のバックアップが欠かせないので、これからは包括支援センターなどとのつながりも深めていって、地域とのつながりを濃く・多くしていく取組も行っていかなければいけないと感じている。

山崎氏： 今の話を聞いていて思ったが、「介護の御世話になる前から地域で知り合いになっていた」というのは結構強いと思う。介護をする人、それを通訳する人ではなくて日常的に一緒に料理をつくったり、それこそ「多文化共生でいろいろな仕事をしてきた人が5年、10年地域で何かを一緒にやっていた人が要介護4になった」といって施設に入ったとき、これはもうおそらく地域でつながっていた人たちがボランティアでもできる気がする。要介護状態になってからどうするか考えると「お金」といったことが出てくるので、日常的に地域の中で関係性をつくる。そのときに何をきっかけにするかというのが大事で、その一つは勿論日本語教室でもいいが、長尾さんが言っていたようにそこに「楽しい」、「オシャレ」、「かわいい」、「かっこいい」という、感性の部分も必要かもしれない。勿論「これはやらなければならない」、「正しい」といった理性で集まる人もいるが、残念ながらそれだけで人は大きく動かないところもある。「正しいこと」は「正しいこと」としてやるが、「正しい」にどうやって「楽しい」を引っ付けていくか。それはおそらくちらしのデザイン一つを取ってもそうだと思う。「ああまたそのテイストか」と思われるのはもったいない。それに関係する人しか手に取らないというのではなくて、「あまりそういう興味はなかったけれどちょっとかわいいから取って帰った」とか、「これは何だろうと気になって行ってみたら、『面白いこと』の隣に『多文化共生』が引っ付いていた」といった立て付けになるためには、実はコミュニケーション、いろいろな人たちと情報伝達するときのデザインの在り方や、あるいはそこで何かをするというときのコンテンツ、中身が大切。これは「楽しい」かどうか。「美味しい」、「かっこいい」、「オシャレ」、「気持ちいい」が含まれているかどうか。それによって人々は「ちょっと行ってみようかな」とか「動いてみようかな」と思う。更に言うと、組織のつくり方も割とそれに準じたかたちで、「自分たちがやりたい」とか「楽しい」と思えることを小さく紡いでいながら、全体としてはどうやって上手く共生していけばいいのか。先に“全体”があって、「この“部分”でそれぞれ役割を振る」のではなくて、やりたいことを組み合わせたら、歪があるかもしれないがひとまずできた“全体”を動かしてみてそれを少しずつ補修しながら、、という組織のつくり方や運営の仕方があるのかもしれないと思った。

「多文化共生」と違う分野＝「他分野」の関係性という意味では、案外「縦

割り」も悪くないと思っている部分がある。縦割りがあるからそれぞれに予算がつく。だから効率が悪いのだが、これを逆手に取ると、「多文化共生」と言っている人たちが縦割りになっている部署と1つずつ組んで何か新しいことをやればいい。「隣の課がやっていることを知らなかった」ということはチャンス。例えば、多文化共生+介護支援の予算が2年経ってなくなってもうこれ以上続かないと思ったら、今度は環境部局で多文化共生+ゴミ問題ということ隣の課でまた2年やって、その後もまた別のところに行けばいい。何か「縦割りを使いこなす」ということがあるような気がする。少しづつがしこいくらいに多文化が共生していくという、本当にやらなければいけない目的をいろいろな分野の人の力を借りながら持続させていく。その中で、王さんが再三言っているようにそれを「仕事」として位置付けるということもやはりしっかりやらなければいけない。それが回るようになれば、目的特化型の組織が作れるようになるし、「これだったらお金を払って来てもらって、、、」ということになり、業界や分野ができて上がる。そうではない分野についてはやはり「楽しさ」を持ち寄って、どうやってそれを運転していくのか。そういった進め方を見極める上でも、積極的に「多文化共生」がいろいろな分野と引っ付いて、「それ新しいね」と言われるようなプロジェクトを起こしていく。これは今の段階においてはとても大切なことだと感じた。



(左から) 山崎氏、河村氏、王氏、森氏、長尾氏

以上